時代をスラッシュ!?

HONDA N-BOX SLASH

■テキスト＝青柳 健司（フォトライター）　■Photo＝川村 勲（川村写真事務所）　■取材協力＝ホンダカーズ北海道 宮の森店 TEL(011)644-9301

プロフィール

■個性派コンパクトカー

軽自動車税が増税される一方で、エコカー減税が導入されるなど、軽自動車を巡る税金の枠組みが変わろうとしている2015年。何やら、ひとつの節目の年となりそうな気配だ。かような時勢の流れは、いかに多くのユーザーが軽自動車を支持しているかの証しであり、また支持を集める魅力溢れるクルマが多数存在することの裏返しと見て取ることができよう。今日の軽自動車の活況を、日本市場のみのガラパゴス現象と揶揄する向きも見られるが、日本の軽自動車をそのまま自国で売られては困るという海外大手の意向が、強く働いていることを見落としてはならないように思える。

そして昨年末、またしても日本国内市場に個性的なコンパクトカーが登場した。それも、ホンダが誇る人気車種N－BOXのニューバージョン、もしくは派生車種、あるいはNシリーズのニューモデルといった存在であり、本誌としても多いに注目するところである。現行N－BOXと見比べつつ、そのユニークな魅力をレポートしていこう。

■インパクト十分

現行モデルとの違いは、内外装デザイン及び装備に尽きる。まず、外見上の大きな特徴となっているのが、ルーフを100㎜カットし、中心からリアに向かってゆるやかに傾斜しつつ、鋭角的に切れ上がるようなデザインを施したリアサイドウインドー周辺との一体感を演出し、絞り込まれたシャープなイメージの車体を実現させたこと。いわゆる、チョップドルーフ風の仕上げである。なおかつ、N－BOX好調の大きな要因であったリア両側スライドドアはあえて不採用とし、またリアのドアレバーをウインドーの頂点部と一体化し（VEZELでも採用された方式）、一見2ドアモデルのごとくスッキリとしたボディラインと描く。それらはいずれも、デザイン性を重視したゆえの到達点。つまり、ファミリー層、とりわけ子育て世代のライフスタイルに応えるクルマが現行N－BOXであるのに対し、子供が独り立ちし生活に余裕が生まれた層の遊びゴコロを満たすため、中でも特にアメリカンスタイルに憧れを抱く人々に向けたクルマ造りをコンセプトとしたのわけである。

試乗車は〝ストリートロッドスタイル〟と称され、写真でご覧の通りブラックボディーの随所でメッキパーツがキラリと光るクールな配色となっているが、ビビッドなカラーを含む計8色が用意されており、さらにルーフトップとボディーをツートーンに塗り分けることも可能で、合わせると18通りの選択肢がある。また、いずれもオプションとなるが、内装のカラーリングをユーザーの嗜好で選ぶことが可能で、さらにボディーと内装をアーリーアメリカンテイストで統一したバージョンも数種類追加配備されており、マイフェイバリットな一台が実現できる。

アメリカン嗜好のユーザーのみならず、ぜひ注目してもらいたいのが、最上級グレードの「X」と「X・ターボ」に標準装備されたFOSTER社製サウンドマッピングシステムである。シフトレバー下部に17㎝サブウーハー、前席左右にそれぞれ17㎝スピーカーとツィーター、後部座席左右にもそれぞれ12㎝スピーカーとツィーターを緻密な計算で埋め込み、重低音から高音までクリアで臨場感溢れる音空間を作り上げたもの。特に、サブウーハーは限られた空間に対応できるコンパクトな設計で、メガホン効果によりどっしりとした重低音を発生する仕組み。見た目の存在感は圧倒的で、ほかにはない独特の室内空間を作り上げることにも大きく貢献している。当システム搭載者は、車内に防音材が加えられるなど静粛性の向上が図られており、さらにオプションで防音材の追加や微振動を低減するシートの装着が可能である。音響に徹底的にこだわりたい向きには、まさに垂涎モノのパッケージとなっている。

■使い勝手も考慮

グレード構成は、先述の「X」と「X・ターボ」を筆頭に、スタンダードな「G」、追突回避系のシステムなどを加えた「G・A」、クルーズコントロールなどのシステムと本革巻ステアリングなどの装備を充実させた「G・ターボ」が用意され、それぞれに4WDバージョンがある。

今回は、全グレードにリアシートの独立スライド方式が採用され、様々な室内レイアウトを実現。また、かけ忘れや解除忘れを回避できる電子制御パーキングブレーキシステムや、パワステの〝重さ〟をスイッチで切り替えられるモード切替ステアリングシステムも標準搭載。趣味性のみを追求したものではなく、使い勝手をしっかりと考慮したあたり、N－BOXの名に恥じぬ仕上がりである。

インプレッション

■大音量で走りたくなる

試乗に提供されたのは、「X」の四駆バー

主要諸元：(N-BOX SLASH X・4WD)

- ●全長×全幅×全高／3,395×1,475×1,685mm
- ●ホイールベース／2,520mm
- ●トレッド／前：1,300mm 後：1,305mm
- ●車両重量／980kg
- ●最小回転半径／4.7m
- ●エンジン／658cc水冷直列3気筒横置DOHC
- ●最高出力（エンジン）／58ps／7,300rpm
- ●最大トルク（エンジン）／6.6kg・m／4,700rpm
- ●JC08モード燃費／23.8km／ℓ
- ●ミッション／ 無段変速オートマチック（トルクコンバーター付）
- ●ブレーキ／前：ディスク
  後：リーディングトレーディング
- ●タイヤサイズ／155／65R14
- ●駆動方式／4WD
- ●乗車定員／4名
- ●車両本体価格（札幌地区）／1,770,000円（消費税込）

ディーラーメッセージ

ホンダカーズ北海道 宮の森店
営業
大隈　里香さん

インパクトのあるデザインや、充実した機能と装備はもちろんですが、豊富なカラーバリエーションにもご注目いただきたいと思います。試乗車は落ち着いた大人の男性向けの色合いですが、女性の方が好まれる可愛らしい配色も可能です。色の組み合わせも数限りなくありますので、思い切り自由に、自分らしさを追求することができるクルマではないかと思います。

ジョンで、車両本体価格177万円。これに先述した防音・制振を強化する〝ピュアサウンドブース〟をオプション追加しており、その効果でドアの開閉が上質かつ重厚なタッチだ。車内の中心下部に収まった17㎝ウーハーは、さすがにひと際目を引き、同時に遊びゴコロを刺激するこのクルマの立ち位置をハッキリと感じる。

スターターボタンを押してエンジンが始動すると、メーター部に筒状の囲いを施したデザインにより立体的な視覚効果があるインパネ内に、パーキングランプが点灯する。これは、電子制御パーキングブレーキと連動したもので、ステアリング左手下のイグニションスイッチをオフにすることでシステムが解除され、同時に点灯サインも消える仕組みだ。慣れるまでに多少の戸惑いもあろうが、新たなセーフティシステムとして、今後は普及していきそうな予感がする。

取材当日は、路面が一部凍結している状況。しかし、発進も停車もいたってスムーズで、四駆の恩恵をあらためて感じる。また、静粛性の高さは特筆モノであった。冬道特有のそろばん状のゴツゴツとした悪路も、突き上げ音が気になる場面は極めて少なく、上級車種と遜色無いほどの仕上がりである。もちろんこれも〝ピュアサウンドブース〟の効果によるところが大きく、オプション追加して間違いないと感じた。

走行性に関しては、個人的に想像した以上にトルクフルな走りだと感じた。特に3千回転オーバーの領域に入ると、その推進力は及第点以上。登坂道でも、非力ゆえにコンパクトカーの潜在的な弱点であるはずのモタツキを感じるシーンが少なく、このクラスではトップレベルのエンジンレスポンスを発揮している。また、ワンタッチでステアリングのフィーリングを切り替えられ、女性や高齢者は軽い設定にすると（通常はやや重めに設定されている）取り回しも楽で、より快適なドライブが可能である。

目玉の一つであるサウンドシステムについては、筆者のような素人の耳でも、臨場感溢れる音響効果を十分に楽しめた。実は試乗する前は、ヤンチャ系改造車にありがちなその場の空気を揺るがす重低音を想像してしまったのだが、もちろんそんなことはなく、極めて上品な音響バランスなのである。それで結局は、大音量で音楽を鳴らす欲求にかられたのだが、ここでもやはり〝ピュアサウンドブース〟の効果は大きく、ドアが振動音を発することもなく、車内はコンパクトなオーディオルームと化していた。このクルマがあれば、好きなジャンルの音楽を誰にも気兼ねせず大音量で、しかもクリアな音響で聴くことができるというだけでも、食指が動くユーザーはさぞ多いに違いない。

■評判のフォルム

N－BOXのルーフをスラッシュする（さっと切る）との語源を持つこの新車種の搭乗は、その名の通りの独特のルーフデザインが鮮烈。これまで、ファミリーや女性層に向けた機能性を追求してきた同クラスの存在にも、思い切った視点の転換をもたらす可能性が多いにある。様々な規制から、実質的に日本最新の軽自動車は購入不可能である某国のクルマ好きたちが、画像でこのクルマのデザインを知り、ネット上で話題蒼然となっているとか、いないとか。とにもかくにも、コンパクトカーの勢いが当分続くであろうことを、物語るかのようなニューカマーである。